

---

# BLACKREGEND

アーセル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLACKREGEN D

### 【Nコード】

N2981V

### 【作者名】

アーセル

### 【あらすじ】

なんの前触れも無く、ゲームっぽい世界に迷い込んだ。

その世界で伝説級のステータスと元の世界で得た知識と技術を駆使し、生き延びる決意をしたのだが。

全く勇者らしくない主人公と仲間達の冒険記

ステージ1 始まりは突然に（前書き）

黒服勇者の伝記を書き直したものです  
お楽しみください

## ステージ1 始まりは突然に

最初に言っておきたい

俺、かざねときと風音時人は酒を飲んでも

ドラックを使っても、幻覚を見てもいない

愛用のパソコンの前に座っていたはずなのだが  
何故か今森の中にいる

ジャングルとかじゃなく、西洋ファンタジーに出てきそうな・・・  
西洋ファンタジー？

自分の服装を見てみる

黒いハイネック、黒いジーンズ、黒いパーカー

俺のお気に入りが、さっきまで着ていた部屋着とは違う  
腰に巻いているベルトポーチは見覚えが無く、  
何故かポーチにくっついていて四つの

ホルスターには刃渡り40cmほどの  
短剣とリボルバータイプの拳銃が二つずつ  
勿論身に覚えが無いが、見たことがある

「まさか・・・」

右手の人差し指と中指をそろえて上向きに振る

・・・何も起こらない

今度は左手で同じことをする

目の前に”表示”された物を見てみる

名前 アーシエル  
種族 人間  
性別 男  
LV 77  
称号 イレイザー  
抹殺者

所持スキル  
短剣 マスター 1000  
拳銃 マスター 1000  
体術 マスター 1000  
暗殺術 マスター 1000  
忍術 813  
解錠 マスター 1000  
索敵 マスター 1000  
スリ 999  
攻撃魔法 601  
回復魔法 652  
補助魔法 756  
料理 422  
錬金術 638  
大工 540  
調合 マスター 879  
裁縫 マスター 1000  
音楽 マスター 1000

釣り 600

間違いない、

MMORPG「Tae Legend」、通称「伝説」での俺のキャラクターデータだ

知らない人のために説明しておこう

空に三つの月が浮かぶ世界、レフィリアを舞台にした

よくあるタイプのファンタジーMMORPGだが

スキル、LV併用型で、好きなようにキャラクターをカスタマイズ、  
たとえば

格闘術を使う僧侶や斧を使う魔術師なんてのができる

それが一番の売りだ

勿論、俺もプレイヤーの一人、だっただと言っべきか

「人を探そう」

やはり情報を集めなくてはならない

俺は高く飛びあがった

俺は素早さを示す数値が突出しているので

高さ五メートル、幅十メートルの

ジャンプが出来る

だが……

「みすつたな」

やりすぎたようだ

現在、高さ十メートルにいます

ステージ1 始まりは突然に（後書き）

質問があれば受け付けます



## ステージ2 蛇との出会い（前書き）

キャラクターとかはあんまり変えてません  
展開とかは結構かえてます

## ステージ2 蛇との出会い

「ティファニア、他人に嘘を付くのは時として必要だけど  
自分に嘘を付くのはとつても罪深い事よ  
必要な物は用意しておいたから  
好きに生きなさい」

母の命日に、私はそう言われ、家出した

「嬢ちゃん、大人しくしな」

あー一人で来るんじゃなかった

私はLV8で盗賊達の平均LVは23  
おまけに六対一、勝てない

捕まったら慰みものにされて  
奴隷商人に売られるだろうし  
自決しかない  
恋もしないうちに死ぬのはイヤだけど  
しかたな……

「……、着地がムズイな」

人が降ってきた?!!

「な、何だテメーは」

「やっちまえ」

状況悪化しちゃった！

すると悪化させた張本人がこっちを向いた

「コイツら、倒しているの？」

「出来るなら」

「なら、遠慮無く」

ヒュン

え、速い！

「フゴ！」

回し蹴りを食らって一人

「グ！」

「ゲ！」

ナイフ投げを食らって二人

「がは！」

短剣で斬られて一人

凄い、これって軍神レギアスのお助け？

「動くな！、こいつグガ！」

「ガブラ！」

残った二人は私を人質にしようとしたけど銃に撃たれてはいおしまい

「ケガは？」

改めて見ると

私と同年代ぐらいの少年だ

真っ黒な髪と黒い瞳

珍しい色だ

顔立ちも整ってる

私が小柄なのを差し引いても背は高い  
176位かな

服装は葬式に行くみたいに黒一色

右目には眼帯

そして、毛の生えてない丸い耳

角も尾も無い

この人、人間？

ほぼ絶滅した種族だから

めつたに見られないけど、運がいいのかな？

「だ、大丈夫です」

「あの、私ティファといいます、あなたは？」

「アーシエル」

この人アーシエルって言うんだ

「スターテス見せてもらっていいですか？」

「ほら」

アーシエルさんがスターテスを見せてくれた

「てっ、エー――」

「LV77?!?!」

LV60以上は神話や伝説にしか出てこないのに

規格外です

「そんなに驚くことか？」

「当たり前です」

自慢しないなんて、謙虚な人

もしかして、運命の出会い？

ステージ3 異界の朝（前書き）

もうすぐ

元になった「黒服勇者の伝記」を  
消します

## ステージ3 異界の朝

この世界に来て二日目

俺は近くにあった村で宿をとった

まず、今分かっている事をおさらいしよう

まず、この世界はレフィリア、「伝説」と同じだ

次に、俺のキャラクターデータが完全に反映されてない

俺は自分のキャラクターを悪魔族に

ディアブロス

設定していたが、この世界だの俺は人間だ

童顔のどこか大人しげな少年だったアバターの外見は、

切れ目のジャニーズ系の、鋭い雰囲気を持つ現実の俺の姿で、

銀髪紅眼だったのが黒髪黒目になっているし

付けてなかったはずの（現実世界では付けていた）眼帯がついてる

装備も武器以外は反映されていない

後、昨日助けた少女、ティファから聞いたことだが

この世界で人間は珍しい

これはゲームの設定と同じだ（原因不明でほぼ絶滅）

そしていはく、一般的にはLV30を超えれば高レベル扱いで

LV60以上は神話や伝説にしか出てこない数値らしい



「伝説」ではLV70以上は俺を含めてひとにぎりしかいなかったがLV60はそこまで珍しくなかったけど

まあ、HPが0になったら即オダブツの世界なら当然か

こっちでも「伝説」でも蘇生手段（ドラオエのザラルとかFFのフェニックスの尾とか）が無いし

信用できる仲間がいると心強い、ゲームでも現実でも同じだ仲間が出来たのは嬉しい、けど・・・

宿の部屋を別々に取ろうかと聞いたら相部屋でいいと言われた

俺は性欲を持って余す健全男子だ

亜人とは言え美少女（いや、だからこそ）と相部屋になれば襲いたくなる、警戒心が無いのか？

ちなみに、ティファの種族はネクストヒューマン亜人

動物を思わせる耳と尻尾が可愛いらしい

まったく、ムラムラさせる奴だ

言うてはなんだが、俺は亜人フェチだ

「さて、どこ行くのかな」

早めに起きた俺はボソリと呟いた

## ステージ4 旅立ちは必然に

只今戦闘中

今回の相手はハンターベアーという熊のモンスター

二メートルぐらいはあり、プレイヤーにとっては最初の壁になるのだが

LV30を超えていれば楽勝で倒せる

左右の腕から繰り出されるひっかき攻撃を  
楽勝で躲していく

俺は素早さを示すAGIが突出している  
これが高いと速く走れるだけじゃなく、高くジャンプできたり  
攻撃を回避しやすくなる

おまけに新体操選手みたいに動ける  
アクロバット  
曲芸スキルを持っているので  
マトロックスの主人公みたいな戦い方が可能  
(イナバウアーで銃弾の雨を回避とか)

「喰らえ」

短剣スキル技  
ヴァルキ  
無限回廊

残像が出来るほどの連続突きが

デスベアーを蜂の巣状にする

短剣スキルは威力が低いので嫌われるが  
スキル数値が500を超えると  
圧倒的な制圧力を誇る

あんま、知られてなかったが

短剣使ってる人は片手で数えるほどしか居なかったし

「す、すごいですー！」

「そう？」

やっぱり感覚が違うんだな

「アーシエルさん、師匠って呼ばせてください！」

「ティファ、いくらなんでも昨日会ったばかりの  
馬の骨にそこまでなついていいのか？  
長生きできないぞ」

「師匠が襲つきだったら、とっくにそうしてるでしょうっ。」

・・・ごもつとも

「まあ、呼びたいなら別にいいけどさ、俺剣技スキルは  
ひとつも取ってないぞ」

どうも剣は性分に合わないのだ

元の世界でも剣道さえやってない

ナイフ式暗殺術は修めたが

話がそれたが、ティファは細剣使フェンサーい

レイピア使いだ（フェンシングで使う剣、イタリア式だから幅広いが）

正直、俺に弟子入りするのはお角違いだと思うが

「構いません、冒険者としての弟子入りです」  
嬉しいが、何か釈然としない

「とりあえず、でかい街でギルド登録しよう」

「はい！」

こうして、攻略法の無い冒険が始まり  
草木の香る大草原を歩きだした

## 閑話 1

ヒットポイント  
HP

体力を示す数値

0になると死亡

レフィリアには蘇生手段（ザラルとか）が存在しないので、死亡は今生の別れ

マジックポイント  
MP

精神力を示す数値

魔法やスキルなど、あらゆる事に使用

ストレングス  
STR

筋力を示す数値

高ければ高いほど直接攻撃（パンチ、キックとか）の威力が上がり、重い武器を装備できる

斧やハンマーなど、重い武器を使っていたり

格闘スキルで戦っていると  
上昇率が上がる

DEX  
ディエクス

器用さを示す数値

高ければ高いほど攻撃の命中率が上がり、

クリティカルヒット（会心の一撃）が  
出やすくなる

鞭や短剣など、器用さが必要な武器を使っていると  
上昇率が上がる

VIT  
バイタリティ

体力を示す数値

高ければ高いほど物理攻撃（格闘術や武器）への  
防御力やHPの最大値が高くなる

また、重い鎧を装備できるようになる

重鎧を装備していると上昇率が上がる

アジリティ  
AGI

素早さを示す数値

高ければ高いほど移動速度、攻撃速度、ジャンプの高さ、回避率が上がる

軽い防具（大半の防御力が低い）で走り回っていれば上昇率が上がる

インジリテイ  
INT

賢さ（IQ）を示す数値

高ければ高いほど攻撃魔法の威力、回復魔法の回復量

確率魔法（ザキ系）の成功率と自分が食らった時の回避率が上昇する

魔法を使っていると上がりやすい

ウィズダム  
WIS

精神力を示す数値



高ければ高いほど攻撃魔法への防御力  
MPの最大値、確率魔法への回避率が  
上昇する

魔法を使っていると上がりやすい

ラック  
LUK

幸運を示す数値

高ければ高いほど運に関わることが  
起こりやすくなる（クリティカルとか）

上昇率も運任せ

L V U P時に最低これだけは上がる、  
最低上昇値があり、種族、個人によつて  
ばらつきがある

スキル  
技術

スキル・LV並用型のため  
一定のスキル値で習得書を使えば

覚えることができる

つまり、L V U Pで自動取得する方式では無い

戦闘用スキル

剣術スキルや格闘術スキル

魔法スキルなど、戦闘関係のスキル

採取スキル

釣りスキルや発掘スキルなど

自然から採取するためのスキル

生産スキル

農業スキルや料理スキル

建築スキルや鍛冶スキル

調合スキルや錬金スキルなど

何かを作るスキル

索敵スキル

マツピングや待ち伏せ（いきなり襲いかかってきた）を回避するためのスキル

冒険者には必須

犯罪スキル

鍵をこじ開けるピッキングスキル、物をすれ違いざまに盗むステイスキルなど文字どりのスキル

こつというスキルは、ステータスウィンドウを開いても、取得者以外には見えない

勿論、やってるところを見られたらただじゃすまない

種族

ネクストヒューマン  
亜人

この世界の人間にあたる種族

耳が動物的で尻尾が生えてたり

角があつたりする他は、人間と大差は無い  
能力も平均的な普通星人

でも人生普通が一番無難

混血児の子孫達

獣人  
ビースト

動物（ライオンとかトカゲとか牛とか）が  
直立二足歩行できるようになつた様な姿の種族の総称

何の獣人かによつて、能力が違う

（牛、熊はSTR 猫、犬はAGI）

悪魔族  
ディアブロス

角と悪魔的な尻尾（細くて、先が か？）  
がある種族

STR、INT、WISが高く攻撃的な能力の種族

反面、HPやVITが低く、打たれ弱い

妖精族  
フェアリー

昆虫を思わせる羽が生えた種族

HP、VITが全種族中最下位だが

MP、INT、WISが全種族中トップ

手乗りサイズと人間サイズ  
の二種類

手乗りサイズだと自由に飛べるが  
人間サイズだと2、3メートルしか飛べない

エルフ

長い耳と美しい外見を持つ種族

INTとDEXが高く、魔術師型

動物と会話ができ、モンスターを  
飼<sup>テイム</sup>い慣らすスキルを  
最初から持っている

ドワーフ

小柄だが、ゴリマッチョな肉体を持つ種族

STRとVITが高い戦士型

疲労ゲージ（疲れを示す、高くなると能力低下、休憩、睡眠、食事で回復）のたまる速度が遅い

発掘スキルの数値が最初から400以上

ヒューマン  
人間

そのまんま人間

亜人以上に平均的な能力

可もなく不可もなく、でも初期能力は高め

太古に絶滅寸前になったので  
もつとも数が少ない（ゲームではNPC「プレイヤーが操作せず、プログラムによってのみ動くキャラクター、村人とかがそう」としてのみ登場）

閑話1（後書き）

質問があれば受け付けます

ステージ5 始まりは突然に(二回目)

なんじゃこりゃーーーーー！

ちよつとまでーーーー！

なんでオレはこんな所にいるんだーーーー！

「しばらくお待ち下さい」

はあ、はあ

今オレは「T H A R E G E N D」の  
世界にいるのだ

すばらしい、まさにゲーマー達の夢だ

しかし、考えを整理するのに二時間もかかってしまった

我が親友、時人なら二、三分で整理できるのだが

行方不明になってしまったが、いったいどこにいるのだろうか・・・  
待てよ、オレも時人もこのゲームのプレイヤーだ

オレがこの世界に迷い込んだなら、時人もこの世界にいる可能性は  
高い

この考えが正解なら、



抹殺者のアーシエルとして生きているハズだ

「天命だ、まさに天命だ」

そしてオレは日陰者の千葉純一ではない！

LV75の双剣士、クロノだ

親友を捜すには都合がいい

とりあえず、これからの方針は

「情報収集、後足と仲間の確保」

そうそう、て・・・貴女はアーシエルの妹、雫さんではありませんか  
なぜここに？

「あなたと同じ理由」

そうですか

「さっさと出発するわよ」

しきられた

しかし雫、いや、セリナはLV63の音術士

詩を詠って攻撃や回復を行う魔法使い系だ

埋め草程度の魔法しか覚えていないオレにはありがたい

待っている、  
相棒<sup>アイシエル</sup>

## ステージ6 ファンタジーに恋愛は必須

「師匠、登録できました」

大きめの街だと、必ず冒険者ギルドが存在するから、私は到着した街リーマルのギルドで冒険者として登録した

ランクEの駆け出しだけど

(師匠はランクSS、一番上)

頑張つて実力を付けて、師匠と肩を並べられる冒険者になりたい

せめてランクAに

クーーーーー

私のお腹が鳴った

うう、恥ずかしい

「何か食うか」

この街は飲食店が多いから食べるには困りません

資金もたっぷりあるし

「おかわりー！ー！」

「太るぞ」

う！

ここは冒険者が良く利用する店らしく  
周りの人達はよく食べる

釣られて二回目のお代わりを頼んでしまったけど・・・  
師匠の言うつ通り、太るかも

私も女の子だからそれは気にする

「ま、その分動けばいいんだが」

師匠がトマトをほうばった

て、師匠、肉より野菜を多く食べてますね

「肉ばっか食ってるといいことないしな、  
それに美容にもいいぞ」

マジすか

「相当実家が裕福だったんだな、家出娘」

え！、なんで分かったんですか

「でなきゃ、小娘一人が低LV+軽装で彷徨してるか

面倒見るって決めたから送り返したりはしないけど」

口が悪くて基本無表情で愛想無しだけど

やっぱり師匠はいい人です

「お前な」

あ、考えてることわかりましたか

## 閑話2

アーシエル・ブラック

i 2 9 6 1 9 — 3 5 6 3

愛称 シェル

本名 かさねときと 風音時人

種族 人間 男性

十七歳

身長 176 cm

左利き

体格は細いが、筋肉質

顔はそこそこ美形でちよつと髪が長い

右目に眼帯をしてるのは理由あり

二つ上の姉がゲームドラッカー

、その影響でゲームは大好き

武器（中世以前の刀剣や現在の銃火器）  
にミョーに詳しい

解錠や爆弾解体が得意

話術もそこそこいける

元からナイフ式暗殺術を修得し、それなりに強かったので、レフェリアでは無双状態

怪しいアルバイトをしていた

趣味は裁縫

ティファニア・フォン・サンクワル

愛称 ティファ

種族 動物（犬系）亜人 女性

十四歳

身長152cm

右利き

犬耳尻尾が生えている以外は人間と大差無し

背の中辺りまで伸びたサラサラの銀髪と碧眼の持ち主で、ハイクラスの美少女

発育もいい

一目惚れしたらしく

アーシエルを師匠と呼び、慕う妹系

家出娘

クロノ・セアツク

本名 ちばしゅんいち 千葉純一

種族 人間 男性

十七歳

身長 172 cm

右利き

髪はボサボサ（手入れをしてない）

顔立ちはそれなり

体格は平均的

アーシエルの親友でゲーム仲間



アーシエルの姉並みのゲーマー

二刀流スキルを修得したのは  
カツコイイから

セリナ・ブラック

本名 かさね しずく  
風音楽

種族 人間 女性

十五歳

身長160cm

左利き

シエルの妹

髪型はショートボブ

ハキハキした美少女

ボカロの音楽が好きなので  
音術スキルを選択

歌はうまい

ゲームでもアーシエルと兄妹関係にしたので



ステージ7 作戦は念入りに(前書き)

遅れてすみません

最近難産でございます

## ステージ7 作戦は念入りに

「ちょっと聞くが、お前の実家は貴族か？」

「・・・それ以上です・・・」

呼吸の速さや目の向いている方向で嘘を言っているかは判断できる、嘘じゃ無いようだ

可愛い女の子に尋問はしたくないが、家出人はPTの将来に関わる問題を  
持つてくることがあるのだ

「実家が外国に送れる戦力は？」

「・・・200ぐらいです・・・」

まずいな、上流階級だから私兵部隊を持っていると思ったが  
そこまで多いとは

貴族だとか上流階級の大半はやたらプライドが高くて  
世間体をととも気にする

娘が家出したなんて知られたら面目と存続に関わるので  
全力で連れ戻しに来るはずだ

さらに貴族以上の血筋は全員金髪銀髪だ

一般市民は茶髪や赤毛（俺の黒髪は金銀以上に珍しい）

ティファの銀髪はかなり目立つ俺の黒髪も目立つ、

この世界にヘアスプレー等のように髪を染める物は無いから  
遅かれ早かれ追っ手が来る

「ちょっとまってる」

俺は近くにあった布屋に入った

「いらっしゃい、ご利用は？」

「フード付きのケープが作れるぐらいの布が欲しい  
色は白で頼みたい」

「三百コルにございます」

コルはこの世界の通貨で、天秤が描かれた銀貨だ

「頼む」

「かしこまりました」

二分後、主が布を抱えて戻ってきた

「こちらは雨具によく使われる物にございます  
旅人に見えたのでこの品を選びました  
いかがですか」

手触りや重さを確認する

さすがは店主、よく分かってる

「買った、百コル追加しておく」

「毎度あり」

「師匠、その布は？」

俺はポーチから裁縫道具を取り出して、ケーブを作り始めたが

「.....」

周囲が無言になるほどの早さで作業を行う

セクハラ行為だが、気づかれないうちにサイズを測り

丁寧に（でも猛スピード）で

こうして、一着のフード付きケーブが完成

「とりあえずこれを羽織れ、多少はばれにくい」

ふむ、思ったより似合うな

「あ、ありがとうございます」

屈託のない笑顔だ

思わず赤顔する

「じゃあ依頼でも探すか」

「はい！」

こんなに懐かれて、いや惚れられていいのだろうか

（家族や仕事仲間、相棒は元気だろうか）

現実逃避のように、関係無い事を考え始めた

閑話3 (前書き)

殆ど行稼ぎだな



## 閑話3

メインキャラクターステータス紹介

アーシエル

LV77

HP	741
MP	1172
STR	827
VIT	326
DEX	463
AGI	1043
INT	400
WIS	691
LUK	205

素早さを示すAGIが突出しているので、C級忍者映画のようなスピードで活動可能

盗賊型のスキル構成だがSTRも突出しているため  
大抵の敵は瞬殺

また、魔法を多様するので、INT、WISも高め

VITは低いですが、AGIが高く、回避率を上げるスキルが多数

あるので防御『力』は低いが、防御『性能』は高い

ティファ

LV18

HP	153
MP	57
STR	89
VIT	87
DEX	71
AGI	86
INT	42
WIS	47
LUK	43

しょぼく見えるのは比較対象が高<sup>アーシェル</sup>LVだから

LV20にもならない駆け出しなら仕方が無い

一般人の平均レベルが5か6なので、これでも高い方

クロノ

LV75

H P	1	0	3	2
M P	7	6	5	
S T R	8	9	9	
V I T	4	3	9	
D E X	3	6	1	
A G I	3	4	5	
I N T	3	0	7	
W I S	4	5	3	
L U K	1	2	1	

戦士型スキル構成なので、攻撃・防御面  
ビルド  
 では強いが、魔法関係は低い

戦闘特化にしているので

戦闘以外では殆ど活躍しない

セリナ

L V 6 3

H P	3	6	4
M P	6	6	6
S T R	1	6	9
V I T	2	9	1
D E X	1	4	2

A	G	I	2	6	3
I	N	T	4	2	3
W	I	S	4	3	1
L	U	K	1	0	0

可も無く不可も無くなスターテス

魔法使いとしては高いが

サポート特化なので

戦闘以外でも活躍

## ステージ8 ハプニングは当たり前

依頼はランクが高ければ高いほど危険、または困難だ

そして自分と同じ以下のランクの依頼しか、冒険者は受けることが出来ない

死んだら終わり、灰になって、はいさようなら

いかん、親父ギャグだ

そして、Eランクの依頼報酬は一人がその日食うだけの金にしかない

つまり、ティファだけでは、行方をくらましてやっていくだけの資金を稼ぐ事が出来ない

実家からの追ってが来たら、即連行だ

PTに入るにしても、信用できない人間が多いのはどこも変わらない

俺に会えたのはある意味ラッキーだったな

俺のランクは最高なので、提示されているすべての依頼を受ける事が出来る

だが、今俺は一人<sup>ソロ</sup>では無くPTリーダーなので、慎重に選ばなくてはならない

最優先はティファのLVUPと資金稼ぎだ

それを考えるとCランク以下で報酬が高めのものを選ぶ必要がある

次に優先するべきは遠くに行くこと、足の確保

足の確保は急ぐ必要はあまりないので遠くに行くことを重視する

となると、護衛系の依頼がよさそうだ

ランクD

種類 護衛

内容

王都デブリジングに向かう  
行商隊の護衛

応募人数

二PT

報酬

各PTに二千コルずつ

この依頼がよさそうだ

安めの宿を使えば、一週間は食っていける

最悪、野宿でもなんとかなる

「この依頼を受けたい」

「かしこまりました、登録書を提示してください」

何故、俺は……

依頼を受け、護衛に就いてから早二日

今のところ盗賊も強力なモンスターも  
来ない

「何事も無く済みそうですね」

あと二日で王都に付く安心感からか、  
ティファが微笑む

別PTの男共もチラチラ見てやがる

確かに周りは何も無い草原だが

「ティファ、この世界にはフラグって物がある」

「ぶらぐ?」

「こうするとこうなるってな感じのお約束  
みたいなものだ、

そんな事言えば何か起こるぞ」

「お、脅かさないでください」

「この辺の地下にはダンジョンがある、

Bランク以上に危険な、な」

本当のことだ

大量のトラップと強力なモンスターという  
最悪コンボ

おまけにボスキャラまでいる

土が崩れ落ちる音がした

どうやら俺がフラグを立ててしまった様だ

最近の大雨のせいで地面が崩れたらしい



直径五メートルの穴が空いている

転落を免れたのは俺だけだ

高さから計算して重傷にはならないだろうが  
落ちたのは最悪コンボのダンジョン

俺でもソロは危険だ

「見捨てるか」

その選択肢は、ある意味最善だ

俺自身の最優先は生き延びることだ  
そうすれば、元の世界に帰れる確率は上がる

だが……

脳裏にティファの笑顔が浮かぶ

四日前に関わったばかりの  
別に助ける義理も必要もない少女

盗賊から助けたのは、自分も殺されそうになったからだ

だが俺は面倒を見てやろうと思った

放り出す機会などいくらでもあったのに

屈託の無い笑顔を俺に向けた彼女を・・・

守ってやりたいと、思った

惚れたのが、そうかもしれない

あんな顔して俺に接してくる人間なんて居なかったし

家族との仲さえ冷えているのだ

新鮮だった

ふと、空を見上げる

どこまでも済んで、雲ひとつない

この世界はRPGと似ている

努力すれば必ず報われる

才能が無いと悩む必要は無い

平等にチャンスを与える

夢を見ることを許してくれる

なら

ステージ8 ハプニングは当たり前(後書き)

はい

グダグダです

## ステージ9 ヒーローはすぐ近く

お母様が流行り病で死んだのは、私が七歳の時だった

元々お体が弱い上に、仕事で

無理をされていたので、安静にしていれば治る

病気だったのに

姉同然に慕っていた侍女は

私を政略道具としか見ていないお父様に物申したせいで  
首になり、会えなくなつた

家のせいで友達も作れない私は二人が居なくなつて

孤独だつた……

だから家出した

サンクワ ル家の三女ではなく、ティファという

一人の人として行きたくて

そして

あの人に出会つた

周りの人たちより早く気がついた私は  
出口を探して歩きだした

師匠が居ない状態だと何されるか

感だけを頼り進んだ

どれだけ時間が経ったのだろう

私は大きな部屋にたどり着いた

どうやら行き止まりみたい

戻ろうと振り向いた、その時

グルー~~~~

五メートルはある巨大な体

八本ある、長く、太い腕

簡単に人を踏みつぶせそうな、大きな四本足

見るからに強そうな魔物だった

「あ、あ・・・」

恐怖で動けない私に向かって

魔物は腕を振り落とした

ここで死ぬ、その事実を受け入れられなかった

(助けて、師匠、アーシエルさん)

必死に助けを求めた私が祈ったのは

今最も尊敬する人だった

「世話焼かせるな、この小娘が」

ぶっきらぼうな、一番聞きたかった声

師匠が私を抱きかかえて(お姫様抱っこ)

魔物から離れたところに立っていた

当の魔物は

師匠に倒されていた

「ウグ、ししよー」

「涙流して抱きつくな、誰が洗濯すると思ってるんだよ」

怒られても、私は師匠に抱きついて離れなかった



## ステージ9 ヒーローはすぐ近く(後書き)

アーシエル、コンクリートの地面に鉄のフラグを立てる

ステージ10 欲情は誰にでも

ザシユ

刃物で肉を切り裂く音が暗闇で響く

また響く

また響く

・・・

気が付けばその暗闇の中で

‘ 生きている ‘ のは二人だけだ

片方の、” 金色 ” の瞳が光る

恐怖で腰を抜かした男に

ムジヒナドクガガツキササル

俺は人に誇れるような生き方はしていない

そう確信している

少なくとも、裏社会に首を突っ込んだ奴は  
だいたいそうだ

そんな人間が尊敬されるはずがない  
なんだけど

「すごいです、あんな強そうな魔物を倒しちゃうなんて」

「当たり前どころがよかったただけだ」

依頼完了の後、王都で俺達は宿を取った

天蓋付きのベッド、高級品の家具、センスのいい壁模様

奮発して高い宿を取ったのだ

これぐらいなければ割に合わない

「私、師匠に付いてきてよかったと思います」

少女漫画だったらバックに花が咲く笑顔だ

亜人フェチな俺にはどストライクなんだか

「もういい、寝ろ

明日も早いぞ」

小っ恥ずかしくなって、俺はベッドに潜り込んだ

一時間後

ティファが俺のベッドに潜り込んできた

貴様、俺に襲えと言っのか

エロゲーによくある展開だ

聞くだけなら踊りだしたくなるが

実際には精神衛生上大変有害だ

そっち方面に免疫が無いのでキツイ

結局、俺は寝不足になった

## ステージ11 家族は似るのが当たり前

皆さんお久しぶりです、クロノこと  
千葉純一です

家族が恋しいと落ち込む  
セリナを励まそうとしましたが

「何しやがる、このセクハラヤロー！」

メイス（杖の先に重りを付けた打撃武器）で  
思いつきぶっ叩かれました

てか、肩に手を置いただけでこの仕打ちは  
ないんじゃないですか、セニヨリータ

「ご、ゴメン、知らない人だと思ったから」

俺はそんなに冷たい人間に見えたのですか？

後さっきの攻撃、LV40は無いと死んでますよ  
冗談抜きで

衛兵に捕まりますよ

逃げたら賞金首ですよ

「まあいい、めぼしい情報はないし、  
これからどうする？」

シエルを探すために聞き込みをしてるけど  
そんなに有名じゃないみたいだから  
成果なし

元の世界に帰る方法もなし

まさに八方塞がりだ

「じゃあこれに出てみる？」

武闘大会

なるほど、自分たちが有名になって  
向こうに知らせるのも手ですね

「うはははははは、ガキ二人が相手かよ」

おいおい、このおっさん舐めきってますよ

「殺す直前までやろっ」

「勿論」

ああ、シエルの妹だ



## ステージ12 良き君主は民が決める

「お、おたすけーーーー！」

S M行為が続いております

ふざけてないよ

セリナ、鞭とメイスしか使っていない魔法？、なにそれ美味しいの？状態

「邪魔をするなーーーー！」

怖！

やっぱりシエルの妹

間違いなくシエルの妹

大事なことなので二回言う

いかにも闘技場の場所であります

今まで五回戦ったけど

雑魚ばっか

あっさり優勝です

「よくぞきたな」

国王に謁見できました

質素だけど良いものだ  
と解る着物に  
豊かに蓄えた髭

威厳に満ちた姿だけど、  
目はいたずら小僧  
みたいな輝きがある

「堅苦しい挨拶は無しで良いぞ」

おー、

しかしこの謁見室、最低限の  
調度品しかないけど、  
良物ばっかみたいだ

「早速だが、余に仕える気は無いか？」

貴殿らの様な優れた人材は  
国の宝だ  
すぐに爵位を与えてもいい」

貴族になれるってことか  
でもな・・・

「「謹んで辞退させていただきます」」

「なぜじゃ？」

「オレ達は旅をする目的があります  
その目的が達成するまで、どこかに落ち着く  
事はできません」

そう、シエルを探さないとな

「なるほど、ならば優勝した賞として  
貴殿らの援助をしよう」

旅の目的を聞かせてくれんか？」

王様、ありがとうございます

「旅の目的は、このセリナの兄であり、オレの親友である  
アーシエルという男を探すことです」

特徴はオレ達と同じ黒髪黒目の人間で、黒一色のなりをし  
右目を眼帯で覆っています

心当たりはございませんか？」

有名じゃないみたいだから無駄だろうけど

「心当たりがある、一人でBランクの魔物を倒した男が  
いるそうだが、特徴が一致する」

「ありがとうございます、仕える件は考えておきます」

戦友よ、今行くぞ

### ステージ13 人生は迷路

この世界に来てから、早いもので  
一ヶ月が過ぎた

一般人ならホームシックをお越しているだろう

精神の弱い人間なら発狂しているかもしれない

元の世界に帰る方法を探す最終目的はそのままだが

この世界に永住するのも悪くは無い

親友やバイト仲間、家族には悪いが

(手紙でも出せればな)

ケータイは持っているが(手回し式の充電器も)  
電波が届かないらしく、圏外だ

まあ、異世界でも使えるなんて都合がよすぎるが

ふと思う、

俺は何故この世界に来たんだろうか

自然界だろうと人間社会だろうと  
すべての現象には起こる理由がある

肉食獣が獲物を狩るのは生きるためだし

雨が降るのは、雲が許容範囲を超えた水を捨てるため

失脚だって、ヘマをしたのがバレたからだ

しかし、俺がこの世界に来たのには理由が無い

召喚された訳でもないし

SFよろしく、次元の穴云々も無かった

ただ、気がついたらここにいた

大半の人間は趣味とささやかな楽しみがあれば  
生きていける

でも・・・中には明確な目的がなければ生きていけない奴もいるし  
何かしらのモノがなくては生きていけると実感できない奴もいるのだ

俺はバイト先で、俺は生きているのだと実感できた

だが、この世界では命懸けの事は起きてない

生きていると・・・・・・実感出来ない

人間として生まれたことが恨めしい

だが、今の俺には明確な目的がある

それでいい

ステージ14 心の闇は誰にでも

ザシユ

ザシユ

グシヤ

ベチヨ

肉を斬り、突き刺し、抉る音

人を刃物で”殺す”音が響く

その音を響かせてるのは

( 師匠? )

十歳ぐらいだろうか



まだあどけない師匠だ

「！」

師匠が何かに気づいた

それは……

五歳ぐらいの女の子だ

師匠がナイフを手に歩み寄っていく

(ま、まさか)

殺すんですか？

女の子は何もわかってないみたい

首を傾げるだけ

ゆっくりと、師匠がナイフを振り上げた

(こんな夢、早く覚めて)

私の知っている師匠は、ぶっきらぼうだけど  
優しい人だ

こんな、無慈悲で残酷な”蛇”じゃない

願いが通じたのか

女の子を殺さず抱きかかえると

師匠は闇の中に消えた

私は夢から覚めた

あの夢に出てきたのは、昔の師匠なのだろうか？

何時か話して欲しい

私は師匠が好きだ、どんな人だろうと受け入れる

でも、師匠はどうなんだろうか

話したあと、何処かに行ってしまうのだろうか

それだけは……

ステージ14 心の闇は誰にでも(後書き)

思いつきりグダグダですが

ご感想お待ちしております

## ステージ15 男のジェラシーは怖いです

お久しぶりです、アーシエルです

.....

俺は何を言っているんだ

ついでだが、今俺達は王都の冒険者ギルド  
依頼選びの真つ最中

「これはどうですか」

どれどれ

ランクD

種類 駆除

内容

西の森で大量発生した  
ジェノホッパーの駆除

応募人数

五PT

報酬

四千コル

ジエノホツパーは、トノサマバツタを  
大型犬サイズにしたモンスターだ

攻守共に大したことは無いが  
バツタだからジャンプするし  
すばしっこい

さらに肉食

経験値はいいけど

「ティファ、これじゃ効率が悪い」

「確かに」

最優先はティファのLV上げ

PT数が多い

別の依頼にしよう

ランク E

種類 検索

内容

ペットを探す

報酬 一万コル

詳しくは・・・

「・・・」

「報酬高いですね」

「却下」

絶対裏アリ

ランク D



種類 探索

内容

ミブナの森で薬草

「月光草」を探す

報酬 五千コル

月光草はいろんな薬の材料になる

報酬もいい

ミブナの森は経験値稼ぎに

ちょうどいい

「この依頼にしよっ」

---

さてと、アイテムも十分買ったし・・

「いたぞー——————!!」

やな予感

「見つけましたよ、ティファニア様」

とうとう来たか

銀色の甲冑の騎士五十人

白いローブの術師三十人

平均レベル35ぐらいだ

一人が歩み出た、隊長格か

「さあ、帰りましょう」

兜を脱いだ

ほお、

ペルONA3の主人公を

金髪碧眼にしたみたいないケメンだな

「嫌です、マクベス、貴方達が帰りなさい」

さて、どうやって逃げようか

「だだをこねないでください、

もっと御自分の立場を考えてください」

「書置きで伝えただけです」

もう帰らないと」

さすがの俺もこの人数は危ないし

「とにかく、帰りましょう！」

「嫌！」

てっティファ、何故俺の腕に抱きつく？！

「き、貴様だな、ティファ様をたぶらかしたのは」

「ちょっと待て、なんでたぶらかすんだ

そそのかしたじゃないのか？」

「私の姫様の前から消える!!!!!!!!!!!!!!」

マジかよ

おまけに姫様？

俺とんだVIPの世話引き受けちまったんだな

「死ぬ————!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

!!!!!!!!!!」

クレイモア（切れ味を重視した大剣）で切り掛てきたので

俺はナイフで攻撃を逸らす

次に横薙ぎの斬撃をジャンプで躲し  
顔面にドロップキックをかます

「フゴ！」

クリーンヒット

奴のHPバーが四分の一にまで減った

加減間違えたな

「逃げるぞ」

「はい！」

手を掴んで

「あ……出来れば抱きかかえてください」

コイツ、ロマン求めたか

まあ、いいけど

俺はティファをお姫様抱っこするとジャンプで  
屋根の上を移動した

## ステージ16 弟子もまた師に似るもの

私は愛銃「ワルサーP99」をホルスターにしまった

ここにも私が探している奴は居ない

大物殺しの仕事だから食いついてくると思ったのに

「何処だ？、アーシエル、慈悲なき毒蛇」

只今森の中、ジャングルの仲でございます

すぐ近くに王都があるとは思えない

あー、逃げ切った

つか、あのペナ3主人公モドキ、絶対執念深いぞ

顔われちまったからとつと逃げないとな

「師匠、終わりましたよー」

フム、

ビククラット（デカイドブネズミ）  
が十二匹

リリムフラワー（人食花）  
が五匹

デビルシード（空飛ぶ種）  
が十五匹

シャドウモス（デカイ蛾）  
が十三匹

レッサーマッドゴーレム（泥人形）  
が十八匹

.....

なんだ、この死体の山は

「さっさと」

「師匠のおかげで、私もうLV24ですよ、LV20を超えたら楽勝だって  
言ってたじゃないですか」

いつのまに

確かに稼ぎのいいポイントに連れていったり、効率のいい  
倒し方を教えたりしていたが

LV18の小娘が短期間でここまで成長するとは

ジジくさい

さて、依頼クリアで後は……

「いたぞ――――――！！」

即 逃走

「この下種め！、姫様を開放しろ！」

こんな目に会いながら

ティファとの旅も悪くないと思う、俺であった



ステージ16 弟子もまた師に似るもの（後書き）

プリニーラハールプレイしている

もしもシリーズにはついていけない

## 閑話4

今回はアーシエル達の装備について紹介します

アーシエルの装備

ブレイズファンゲ

短剣

攻撃力100

長さ20cm

重量3kg

ボスモンスター「ブレイズウルフ（馬鹿デカイ銀色の狼）」の  
レアドロップアイテム

（倒すと手に入るアイテム）

短剣のなかでは五本指に入る魔剣  
重いので扱うのが難しい

ゴットイーター

短剣

攻撃力108

長さ22cm

重量3kg

難易度AAAのダンジョンで  
手に入る魔剣

毒、麻痺、眠り、HP吸収の効果が  
付与されている

通称「神殺しの悪魔の牙」

オルトロス

拳銃

攻撃力123

有効射程5メートル

重量2kg

ボスモンスター、「オルトロス（頭が二つあるデカイ犬）」  
から手に入るレアアイテム  
二つで一セット

パーカー

体装備

防御力58

重量8g

アーシエルが現実世界で着ていた物  
実はケブラー（防弾素材）で出来た

防弾服

ただの服

防御力5

重量・・・とにかく軽い

ただの服

ティファの装備

ダークリパルサー

細剣

攻撃力53

長さ1.2メートル

重量1kg

そこそこの業物

名前の意味は「闇を被う者」

お守りケープ

装飾品

防御力89

重量 2g

アーシエルが作ったケープ  
再訪スキルMAXで作ったので  
あらゆる耐性が付いている

ただの服

防御力 5

重量・・・とにかく軽い

ただの服

## ステージ17 告白は心を刺す

正義のヒーローっていると思うか？

警察？、下はともかく、上は腐った奴が多い  
手柄のためにロクに取り調べずに決めつけるし  
拷問紛いの取り調べだっする

まあ、ちゃんとした人もいなくは無いが

自衛隊？、人殺しの武器を持って  
人殺しの訓練をしてる組織が？

完全悪が居ない世界だから完全正義も無い

悪が栄えた試しは無いが無いと言うが  
現在五百万の凶悪犯罪者が懲役さえ受けずに  
釈放されている

所詮正義は無いな

ウルトラマンの心を持つてる奴なんて

ここは訓練都市ガッツ

定期的に冒険者を目指すものを訓練したり

冒険者になるための試験をしているから  
そう呼ばれるようになった

「明日、登録試験があるんですね」

「年に一度の行事だからな、街はお祭り騒ぎになる」

俺は気づかれない様ため息をついた

ティファは俺を慕ってくれる

でも、俺には慕われる資格なんてないし

もう隠し通すのも疲れた

もっと共に旅がしたいが

「ティファ、大事な話がある」

「落ち着いて聞いてくれ、俺は……」

「暗殺者だ」





ステージ18 恋する乙女は

「・・・・・・・・」

私は眠れず、何度目かの寝返りをうった

その後、師匠は言った

自分がどれだけの人を手にかけてか

何時からやっていたかを

人を殺すことに躊躇いも恐れもない

蛇がカエルを殺す様に、人を殺す

それが自分なのだと、師匠は言った

あの夢は事実だった

やはり師匠は蛇だ

だけど……

「師匠、起きてますか？」

「ん？」

「私、薄々そうなんじゃないかって、思ってたんです」

「……………」

「でも、師匠が私に向けてくれた優しさが私には嘘に思えないんです」

「お前を守りたいって思ったのは本当だからな」

「だから、私は貴方に付いていきます  
たとえ血と死体で埋めつくされた道でも」

私は師匠のベットに潜り込み、師匠に抱きついた

「貴方に会えたこと、後悔しません」

師匠が私を抱きしめた

「ありがとう」

ステージ18 恋する乙女は（後書き）

結局グダグダです

サブタイトルを追加しました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2981v/>

---

BLACKREGEND

2011年12月3日00時23分発行